

【プログラム－プロジェクト 懇談会 ～人文社会系視点から】

昨年実施したプログラム内の IS,FS 研究代表者を対象にした、プログラム－プロジェクト懇談会を、本年度も実施しています。本年度に FS に移行したプロジェクトと、新たに本年度から加わった FS 代表者を対象にして、人文学の専門家と率直な意見交換を行う場となりました。研究の概要と今年度の方向性について最初にプレゼンテーションを行い、プログラムの体制や方法、目的などについてそれぞれの代表者が悩んでいる点についてもともに考え検討していただきました。

『森林の価値とは -森と生きるひとと社会の未来像-』 (大手信人)

開催日：2023 年 5 月 15 日

コメンテーター：鬼頭 秀一 東京大学名誉教授 (環境倫理学)

「森林の価値」「森林と社会との隔たり」を問い直そうとするプロジェクトの方向性と方法について高く評価された一方で、誰にとっての価値であり、誰との隔たりかという文脈や、地域によって歴史的に大きな偏差をもつ森林についての見解など、基本的な認識枠組の曖昧性は対処していく必要があることが指摘されました。

『森林野生動物の持続的で公正な狩猟に向けた地域実践と科学の協働研究』 (本郷 峻)

開催日：2023 年 5 月 18 日

コメンテーター：市川 光雄 京都大学名誉教授 (自然学)

野生動物の狩猟現象を通して、在来・地域知と科学知の対等な関係性による森林生態系の保全を展望しようとする研究の現代的意義については、高く評価された一方で、在来・地域知と科学知の切り分けの困難さや、両者の乖離や敵対状況における研究者の立ち位置の曖昧さが指摘された。また対象とするフィールドサイトの特徴と絞り込み、また少なくともサイトの責任者間での問題意識の厳密な共有と理解について一層の努力が必要という助言がなされた。

『「持続可能性」概念にかかる認知、行為、文化の把握と在来知の脱周縁化』（山田 肖子）

開催日：2023年6月7日

コメンテーター：大澤 真幸 京都大学元教授（社会学、社会理論・社会思想）

「持続可能性」という概念と言葉が、SDGs などによってグローバルに社会的受容がされているように見える反面、この言葉が積極的に多くの人を惹きつけているかどうかは、IS で示した自然科学におけるこの言葉を含む論文の激増に対して、人文・社会科学においてはそうではない傾向から疑問があることが示されました。また本 FS が基点にと考えている非マジョリティの視点に立つと、グローバルサウスの社会で生きる多くの人々にとって、持続可能性は、現状を大きく変革することを意味せず、その次に構築される社会が、これまでの歴史的不正義を正すかどうかは曖昧なままであること、従って、持続可能性の持つこの両義性（光と闇）を直視する問題意識が必要であり、そのためには、抽象的な地球視点ではなく、現場とローカリティを通して実践し思考する視点の潜在力に注目することが必要であることが提示されました。